

「小説の運命Ⅰ・Ⅱ」讀書メモ

平成三十二年七月十九日

へはじめに

「小説の運命Ⅰ」は昭和三十三年三月號「中央公論」に初出、
「小説の運命Ⅱ」は同年三月下旬に執筆、三十三年一月刊の
新潮社版「新文學講座」第一巻「理論篇」に所収。確認は
してゐるが、昭和三十四年八月刊の評論集「小説の運命」に
まとめられてゐるものだらう。
全集一卷P.607に「小説の運命」といふ流行語……の表現が
あるが、これは、この表現もまた當時の文壇で、共通の問題と
して認識されてゐたものなだらうか。一見「小説の運命」とは
どういふ意味があるか。小説に運命などあるものだらうかと
とまどふのだが、恒存は、これも「四五十年前における
自然主義作家の不安の現代的翻譯にあらずしてゐるんで
あつうか」と言ひ、この「流行語」を「あつう人々」の「樂天的な
態度に鋭い疑義を投げかけてゐる」。
しかし、鉤括弧するには用ゐられぬとしても、「小説の運命」について

論じて、恒存の右にある文藝者たるかうと思はれるほど。
これは、恒存にうつつの課題であつたことは確かだ。
文中で恒存は「ヨーロッパの歴史的事實」を展開しつつ、
西欧作家と問題意識を共有しきつてゐる様である。
しかし、日本といふ場は、目を転じねばならぬ。恒存の目線
あまりに日本的な特殊性が、映じてくるのか、常である。
その彼我の落差に、そのほとんど越えがたい溝が存在し、耐へつつ、
「ぼくたち」知識階級の責任と義務を文章表現によつて
果たせんとする。現代の知識階級にとつて、精神の
危機」といふ課題認識の痛切なほど深さと、危機に対
峙せんとする強靱な意志と……批評家恒存の批評精
神の躍如とした作品であると感ぜられる。

各段落の要点

段落一

・小説の限界と終局といふ問題

この数年 いくつかの作品において 常にふれてきたこと

各自の客観性の深さこそが重大・解決法はその後よい

・作者も読者も自己のうちの個人を救ひえぬ 絶望



自己を 個人を 救ふ方向へ 脱出をはかろうとする

・十九世紀の個人主義のゆきづまり



個人そのものかゆきづまったわけではない



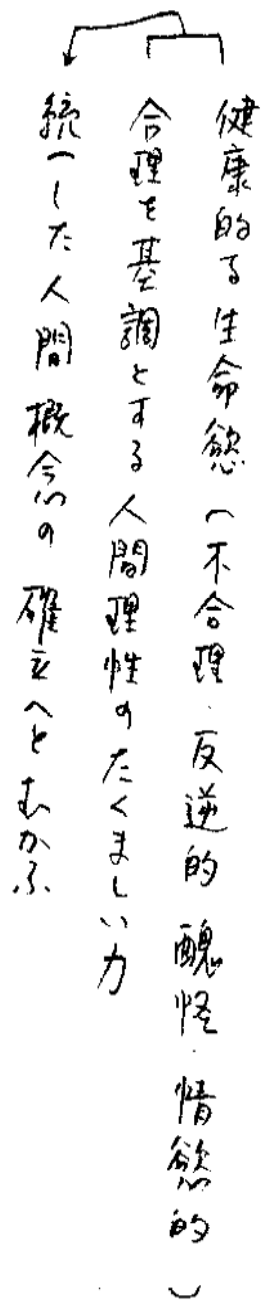
混同・錯誤



昏迷・錯乱

段落二

・神への反逆にはいまうた小説の運命
・ルネサンス期の人間



理想人間像を基準

・神への反逆ゆえ、あらゆる対立が生じ、小説の運命が成立

発見と統一 エロスとカオス 反逆と帰順



これらの対立を 解消にむかう努力と過程とが 時間的に 展開される



最も本質的対立（「現象」と「観念」との対立）をあらわすか
小説 ↓ 十九世紀の隆盛

・小説。統一性格
個人的閉鎖的で形式的固定化を嫌ふ
造型性をもたず、造型性と対立するところにジャンルとしての
薄弱さが生ずる

段落三

・散文の運命

ルネサンス「神と自然とから人間が自主性を奪取
十八九世紀「支那者および社会環境に對し自由・平等を唱へ
十九、二十世紀「個人的自我・集團的自我の対立
←

小説が自己を純化
精神の生理「小説の生理

←
技術的授受と継承とが不可能な領域において
成立する、形式も多種、多様

・個人主義の凋落と共に 個人の權威は否定され
ふいやかたれんとしてゐる

社会的価値を通じて以外に
個人の存在は認められる
←

二十世紀の理想
しかし進歩は政治の理想であり
文學の道ではない

←
個人と社会との対立において
個人の固執し、個人を確立すべき
小説はこの苦悩の個人から
出發すべきだ

・知識階級は、個人の運命に責任がある、前世紀の先達を
對する義務も果たさねばならぬ
なによりも現代にその理想を、自己にその理想を
中心としてあるほかはない

・日本の近代文壇と

社会との連繫を絶たれ、ヨーロッパ近代文壇と相似の運命を辿った。

・今日の日本の小説の限界は、夾雑物の重荷（政治的、物質的）の解決を要する問題（ゆえに）限界にすぎない。

ほとんどの個性そのものが立體性と深みを欠いてゐる。
社会へのかかほりへの行動的意欲が不足してゐる。

←

ほとんどの自身の、ほとんどの社会の限界に対し、ヨーロッパ的解釈や解決法を適用して、覺悟を持って

←

現在の二つの文壇觀も重流とせ文壇との裝飾に用ゐられかねない。

←

限界に墜ちるにかけ墜ちるにしくはない。

小説の運命Ⅱ

各段落の要点

段落一

・小説の運命」といふ課題

ほとんどの自身の精神が自らの存在を確證しようとする様式の探求を意味する

現代の知識階級にとって、つねに自己の存在をおおむねかす現代精神の危機としてあらはれるもの

「小説の運命」とは、ここにルネサンス以降の近代人の精神状況と、歩調を一にするものと恒存はとらへてゐる。

・近代日本における「小説の運命」

「ロマンイシオンとしての文學論 および文學論的文學」
「イニツェリオリティ コントラスタス」内在せる文學

← 近代日本文學における發想と多義譜とにかかける文然

← 自らの自らに対する信用を失ひ、文學界に対する猜疑が増大してついにこれに固執する情熱が危殆に瀕せしめる

・小説の危機に 日本で最初のミヅノミナ 小林秀雄

私小説的完成によつては、自己の真意を猜疑する精神の不安にいかなる均衡をも予へられぬ

批評家（小林秀雄）のしごと

・自分自身のクリティシズム状態に對してする あるいは對立的に立ちむかはうとする 精神型態になる

精神と肉體 理性と本能 理智と感情 感情と憎悪

個人と社會 自我と他我 合理と不合理

對立の危機 この對立の危機自身の真意をいかにして保証しうるか

↓ゆたかる造型性にくみまれん作品を擧ること
批評の造型的な足か可能

（ヨーロッパ文學と日本のナラズ）

段落二

・フーバーのしごと

彼は小説家として その作品の秘密をかれ自身の夢想の熱情のうちに閉じてゐた

← その方法とは

作品の表面上は、實証主義的批評精神によつてあるゆる夢想を放逐し、合理と文然の網目でおほひつくした

しかし、そこに追放されたはずのロマネスクな夢想の
作の裏には、あのリアリスティックな無表情の記述の
保証に立ってゐるのぞ

←

小説概念の書き手がおこるはれた

批評精神は小説を七折しはしなかった

ロマネスクなものは、必死地の追ひ込まれつつもかへって
純粋に激しく生きあびてきたといへる。

二十世紀の批評精神は、再びロマネスクなものに
攻撃を開始した

リアリスティック小説の限界からの脱出を試みた大戦後の作家達
二つの方向の代表は、カルト・マルローかゝる。

小説におけるロマネスクとは

夢想と荒唐無稽とアヴァンチュール(冒険)との世界

統一性と合理性への反逆

現実の常識性から逃れんとする情熱

素材からの自由を欲する生命欲

セルバンテスのドン・キホーテ

小説の運命はもともとそのアイロニーにある

ドン・キホーテのロマネスクをサンチョが振殺せんとする

十九世紀的リアリスティック小説はアイロニーを喪失した

ロマネスクな面が、あつたものはあつても、ロマネスクの
存在する余地がなくなる

ドン・キホーテのいる、サント・パリのサント

しかし、偉大なるリアリストたちの創作にあふ小説家の精神とは
いかなるものか

作者自身か口述に苦笑を浮かべることによつて
現実の人生に耐へ、みづかきと救ふこと

・ 讀者とも同じ境地に誘ひ込む

・ しかし、人間存在の究極的真実であること、笑ひは失はれつつある。ぼくたちは現代人は、夢想と常識とも並列せしめることができなくなつた

段落三

・ サルトルとマルローに見る、真実の探求とは

サルトル 夢想と精神との世界（行動の世界を追放）

マルロー 常識と行動との世界（精神の世界を追放）

サルトル ・ ロマネスクなもの、現象の道を通つてゐる

・ ロマネスクと常識との対立相剋とか、笑ひが生じるのであり、この笑ひの深さを身にしかけて体験してゐる人間を小説家と呼ぶべき

笑ひを知りぬ サルトルに至つては、小説はそれだ、小説の概念は、変つてゐるのかもしやぬ

マルロー

・ 個人々精神は、みづからそれ自身の保証に立つ得ようか、といふ サルトルへの疑ひ

・ そこで、ルポルタージュ、映画の方法こそか、最も近代的な真実探求法であるとする

・ 現象の素材の盛り切れぬ、自己の精神的真実であるといふ、甘いロマネスクな考へ方は抛棄した

段落四

・ 近代ヨーロッパの小説の歴史

人間の真実の認識再現

その真実を自分の身につけようとする行為的實踐

この二面の活動を深化してきた、神に型どれる人間概念の探求

創作も読書も自己を救ふ行為的實踐でなければならぬ

人間とは、ロマネスクな夢をいだきながら、つらさを味わう。
 現實には生きている苦しさの耐へ、口辺に苦み笑を浮かべ自らを
 笑ひ、苦しさの耐へることを救はれようといふのだ。
 小説は、本來的に自らの内部に笑みをたたき藏してゐる。

← 人生に救ひのいることを証明しようとし、リアリズム小説は
 さうすることゝ、ほくたろを救つてゐる。
 作家も讀者も自由に、その世界以上に生きのびる。
 余地を残してゐる。

・サルトルとマルローの小説

共通點として、現實世界での行動に対する、絶対的信賴が
 ある。

小説は、生命を賭けた仕事ではなく、生命はすむ。
 小説の外で賭けられおめで、作品はその決算報告書といは
 行動への処方箋であるのだ。

←

・十九世紀小説は現實の人生に自由のいることを証明しようとし、
 現代小説はそれに反撥し、精神の自由を回復しようとし、
 したが、創作行為と讀者行為からは、逆に自由を
 追放してしまつた。

・小説に救ひを求める讀者に、作品の外を指さす。
 そこには哲學があり、倫理があり、社會的行動がある。

・現代はロマネスクなものをあたかも小説のうしろに隠せんと
 企てるが、失敗に終り、現實そのもののうちから
 追ひ込まれてしまひさうである。

・小説は、科學と科學化されつつある政治とにより、
 精神の王座から轉落せしめられるのか。

現代精神にとって「小説の運命」こそ最大の課題だ。

・日本における「小説の運命」の課題の特殊性については
 I 章を参考照しなさい。

恒存はこの評論で小林秀雄を日本の文學を批評の第一人者と
して、その仕事について書いてゐるが、恒存も、それに倣ふとも
あらぬ仕事をしてゐるではいかと、今回の作りの感に感した。
「自己の存在をおびやかす現代精神の危機」といふ重大な問題を
個性の履歴の必然性においていかに深く憂鬱感してゐるか。
恒存が、自ら表現して見せてくれたのか、この評論である。
ヨーロッパにおける小説の歴史に対する理解と洞象示の
深さは見事であり、十九世紀の偉大なリアリストたる作家の
仕事への共感も、恒存にとっては、他人事ではなく感じられる
ゆゑ、大層深いものがある様だ。しかし、恒存の危機
意識を、批評精神は、日本の文壇に真向ふ時、
それのあまりに本質的に鋭いために、文壇諸氏は、
自分か切られてゐるのに、痛みを感じることなくやり過ご
せるのだらうか。彼等の落差の大きさを前に、ひとりだ
それを見する恒存の孤獨を、つくづく感いたことである。